

超時空要塞マクロス～
熱気バサラ放浪記～

n a o m i

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Dr. 千葉のとある実験に協力して全ての宇宙に自分の歌を響かれる壮大な旅に出た熱気バサラ。最初の舞台は二人の歌姫が歌う数十年後の世界：今熱気バサラの新たな伝説が幕を開ける。

あらゆる世界にバサラが「俺の歌」を届けます。

目次

マクロスF

EP 1 俺の旅を見ろー | 1

EP 2 ダイヤモンド クレバス

5

EP 3 ライオン | 10

マクロスΔ

EP 4 僕らの戦場 | 18

マクロスF

E P 1 俺の旅を見ろー

「千葉さん、千葉さんってば」

ピンク色の髪をした少女が中年のおじさんを叩き起こす。

「うにや、ミレーヌさんどうしましたか」

「バサラ見ませんでした。バサラのやつ『旅に出る』って置き手紙残してどこかに行った
きり戻って来ないんですよ」

「すみません。ミレーヌさん。バサラさん今、私の研究に協力して頂いているのですよ」

「えー。もう、ライブとかどうするつもりなのかしらバサラのやつ」

「さあねえ、快く引き受けてくれたのでなんとも」

「本当に勝手なんだから。…でなんの研究なんですか」

「よくぞ聞いてくれました。それはですね…」

「着いたぜ」

宇宙一熱く歌を愛する男熱気バサラはどこなのかもわからない宇宙をさま迷っていた。

「俺の歌を聴きたいヤツはどこだ」

V F 1 1 9 改を乗り回し宇宙を駆け回る、暫く航行していると得体のしれない生物がバルキリーを襲っているのを目撃した。

「まずはアイツらからだな」

得体のしれない生物に近づきスピーカー弾を打ち込む。

「よし。俺の歌を聞けー」

バサラはいつものように歌を歌う。突然のことに動揺したのか得体のしれない生物はバサラを追いかけて出す。

「なんだこの歌初めて聴くがなんだかスゴく熱い気持ちになる」

「この歌はまさか…」

「隊長何かご存知なのですか」

「かつてとある銀河の移民船団でブレイクして瞬間に全銀河に名を轟かせた伝説のロックバンドがあった」

「なんてロックバンドなんですか」

『Fire Bomber』

「Fire Bomber…」

「しかもこの声はボーカル熱気バサラにそっくりだ」

「隊長見てくださいヤツら離れていきます」

バルキリーのパイロット達は得体のしれない生物が自分達から離れていくのを確認した。

バルキリーのパイロット達はバサラに近く

(この機体バサラが戦場で歌うときに乗っていたとされるバルキリーに非常に良く似ている。本当に本人なのか)

「赤いバルキリーのパイロット援護感謝します」

「援護、俺は俺の歌いたいよう歌を届けただけだ」

(信じられんその行方すらわからなかった熱気バサラが目の前にしかも資料の写真から歳を取ってるように見えない)

「自分はフロンティア船団防衛軍所属のハリー軍曹であります。貴方は」

「バサラ。熱気バサラだ」

二人は衝撃を受けた。行方不明と言われていた人物が突如現れ目の前で都市伝説と化した『歌で戦闘を止める』ことを当たり前のようにやってのけたのだから

「バサラさん。私はフロンティア船団防衛軍コーエン・ライナー大尉であります。出来たら我々にご同行願えないでしょうか」

「ああいいぜ、どこへ行くんだ」

「我々の住む『マクロスフロンティア船団』です」
こうしてバサラの壮大な旅の1ページが刻まれた。

EP2 ダイヤモンド クレバス

フロンティア船団内に到着したバサラ

「バジュラ…さっきのはそんな名前なのか」

ライナーから現状を聞きつつフロンティア船団を案内される。

「はい。この銀河に突如現れた生命体で目的もわからない得体の知れない奴らです」

「歌が届いた。奴にはハートがある」

「一部の者はそう言いますが、確証はありませんよ」

「歌…」

静かで優しい歌声が響き渡っていた。

「ああ、シエリルですねシエリル・ノーム。『銀河の妖精』と呼ばれているこの銀河のスターです」

「あいつ本当に歌えてるのか」

「どういう意味ですか」

「あいつの居場所わかるか」

「いや銀幕のスターですから私には…あつそういえばシエリル・ノームと面識のある民

間の軍事組織ならもしかしたら」

「そいつらに会わせてくれ」

ライナーの紹介でマクロス級戦艦にたどり着くバサラ

「俺の知ってるマクロスより随分小せーな」

「依頼を聞いたときは驚いたがまさか本物とはな」

濃い髭を生やした軍服の男がバサラを出迎えた

「私がマクロス級戦艦『マクロス・クウォーター』艦長ジェフリー・ワイグナーだ」

「熱気バサラだ」

「要望の件だが、相手方も承諾してくれた。護衛をつけるのでついていってください」

「わかった」

「なにしてる早く来んか」

美形の男が奥で立っていた。

「早乙女アルト。彼が案内してくれます」

「よろしくな」

「…」

「まあいいや、案内よろしくな」

「…」

「アルトちよつと待った」

眼鏡の男がアルトを呼び止める

「なんだミシエル」

「バサラさんサインを頂けますか」

「お前…」

「ああいいぜ」

「オズマへと書いてもらえると」

「お前宛じゃねーのか」

「俺達の隊長貴方の大ファンなんですよ、ただどうも恥ずかしいらしくほらあそこに」

ミシエルの指射した方向では窓からイカツイ男がこちらの様子を見ていた

「オズマに言つといてくれ、今度ライブに招待してやるよつてな」

「いやー助かる、サンキューな。アルトあとは頑張れ」

「お前他人事みたいに言うな」

ミシエルは足早にその場を去っていった。

「なあ早く案内してくれよ」

「…」

アルトの案内のもととある屋敷に着く二人

「なんでこんなコソコソと入るんだ」

「俺はここを出禁になってるからだ」

「おいシエリル連れてきたぞ」

襖を開けると桃色の髪をした女性が布団で横になっていた。

「レディーの部屋なんだから開ける前に一声かけてくれない。：驚いた本当に熱気バサラなのね」

「お前がシエリルか、あの歌はなんだ」

「えっ」

「町で流れるお前の歌声、良い歌だ。けどなんかお前じゃない感じがした」

「どういう意味、私の歌を初めて聞く貴方になにがわかるっていうの」

シエリルの顔があからさま不機嫌になる。

「『歌』は歌う人の心を正直に魅せる。自信に道溢れた力強い歌声がお前の歌じゃないのか」

動揺を隠せず思わず下を向くシエリル

「それは…」

「お前いい加減にしろよ」

アルトがバサラの胸ぐらを掴む。

「アルト」

「好き勝手やりやがって。何も知らないくせに」

「ああ、知らねーな知らねーけどこれだけはわかる。シエリル・ノームってヤツは歌に魂を込めれる熱いヤツだってな」

全てを、悟られたかのような言葉に呆気取られる二人

「邪魔したな」

言いたい事を言い尽くしたのかその場を去るバサラ

「流石熱気バサラ：私の尊敬するアーティスト」

「シエリル：」

「私、歌うはアルト。周りの意見なんてどうでもいい、この命尽きようとも、私は私が誇れる私でいるために最後まで歌い続けるわ」

急いでバサラを追いかけるアルト

「おい、熱気バサラ」

「やっと話してくれたな早乙女アルト」

「頼みがある」

「…なんだ」

「もう一人助けたい人がいるんだ」

EP3 ライオン

「これよりフロンティア船団防衛軍はバジユラ本星攻略作戦を執行する」

フロンティア船団によるバジユラへの総攻撃が始まった。

「早乙女アルト出るぞ」

アルトの所属する小隊も出撃した。新統合軍のバルキリーで…

「あんた良かったのか一緒に来て」

「俺は歌えればそれでいい、どこにいようが俺のやりたいことは変わらねー」

「ぶれないなあんだ」

「お前はいいのか、こんな形で」

「…俺はどんな形でもいいから彼女を…ランカを助けたい」

「わかった手伝うぜ」

とあるマクロス級戦艦の甲板に用意された特設ステージに銀河の妖精が立つ

「私の歌を聞けー」

「いい歌だ。これがシエリル・ノームか」

「シエリル…ああ行くぞ」

シエリルの歌に鼓舞されたフロンティア船団防衛軍がどんどんバジユラの本星に近づく。

「行けるこのままなら…!?!」

突然宇宙に広がる歌声。バジユラがその歌声と共に力を増し反抗を開始する。

「今あなたの声が聞こえるここにおいでと〜」

「この歌はリン・ミンメイの」

「ランカ」

アルトのバルキリーが隊列を離れランカ・リーの幻影への接近を試みる。

「待て、早乙女アルト」

「そこをどけ熱気バサラ」

「ここは俺に任せてくれ」

「なっ。」

「お前は作戦に集中しないといけねーだろ」

「俺はランカを助けるために…」

「…今のお前では届かね」

「なんだと」

「お前の気持ちは今ブレブレだ、二人とのこと…自分の夢のこと…S・M・Sを離れて

「……にしていることすらお前はまだ迷っている」

「……」

「そんな中途半端な気持ちじゃ、全てを失うぞ」

「俺は……」

「時間は俺が稼ぐだからその間だに決意を固めろ」

「……。わかった」

「……つたく若いのは世話が妬けるぜ」

バサラのバルキリーがランカの幻影に近付く。バジユラは大量の群れで行く手を阻んでいる。

「さあ、お前達の気持ち……俺に聞かせてくれ」

「#*S?」

「俺の歌を聞け……!!!」

（どうして皆。襲ってくるの……バジユラは只私達について知りたいたいだけなのに、来ないでバジユラは未知の生物なんかじゃない。心を持った生き物なの）

「Let's go 突き抜けようぜ……」

（歌……シエリルさん……違う。なにこの純粹で穢れない歌声は）

(よう。ランカって言うんだってなお前)

(誰)

(俺はバサラ。熱気バサラだ)

(なんの用ですか)

(お前スゲーな、バジユラと心を通わせるなんて)

(!?わかるんですか、バジユラに心があること)

(ああ、俺の歌が届いた。それが何よりの証拠だ。なあランカ。バジユラには心を開いて正直に話せるのに、なんでアルトには本当のことを話さないんだ)

(そつ、それは…。アルト君バジユラのこと心の底から憎んでいるから)

(アルトは別にバジユラのことそんな風に見てないと思うぜ)

(でも実際に彼は)

(ランカがアルトにバジユラのことを話した時、本気でぶつかったか)

(えっ)

(アルトの一言で諦めちまったんじゃないか)

(そつそれは…)

(本気でぶつかれ相手が理解出来るまで。お前にはそれが出来る方法がある)

(歌うこと…)

(そうだ。どんなヤツでも歌に込めた気持ちを偽ることは出来ない)

(私の想い…)

(そうだお前の想いを歌に乗せろ)

「ランカ」

(へっアイツも気持ちの整理が出来たようだな)

(バサラさん何処へ)

(後はお前達3人の問題だ。俺は俺のやることをするぜ)

バサラのバルキリーが戦場に戻る

「そのバルキリー邪魔だどけ」

「さて、こいつを試してみるか」

バサラはある装備を取り出した。

「盾…」

「サウンドシールドって言うらしいぜ。俺の歌を聞け〜!!!」

バサラが歌い出すとシールドにエネルギーが収束され始める。

「ファイヤー」

掛け声と共に光線がバルキリー隊を襲う

「バルキリーの機能が停止した」

「あれを撃ち落とせ」

バサラに攻撃が集中する

「おいおい勘弁してくれ」

攻撃をシールドで防ぎながらかわすとシールドに当たった攻撃のエネルギーを収束し始める

「ボンバー」

バサラの掛け声で第2波が飛ぶ。バルキリーの機能が停止し光線を受けたバジユラが大人しくなった

「ルカって言ってたな、サウンドブラスターに変わる装備…悪くねーぜ」

バサラが奮戦していると。どこからか希望に満ちた2人の歌声が宇宙に響き渡る。

「私の歌を聞けー」

「皆抱き締めて銀河の果てまで」

「へっ、3人で乗り越えたか…良い歌じゃねーか」

バサラが歌声まで近付く

「バサラ」

「バサラさん」

「良い歌だ。俺にも歌わせてくれ〜〜!!!」

「風はやがて東へ向かうだろう」

3人になった歌声はその場にいた全ての生き物に伝わる

「スカル4がクイーンバジユラをコントロールしているグレイス・オコナーを討つたと情報が…」

「本気の身体見せつけるまで私眠らない」

バジユラは新たな星を探す旅に、フロンティア船団はバジユラ本星に降り立った。

「行くのか熱気バサラ」

「ああこの銀河に俺の歌は届けた。俺とシェリルとランカの歌で『コスモワープシステム』のエネルギーも貯まって次の場所へ行けそうだ」

「バサラ。貴方には感謝してるわ。またいつかデュエツトさせて頂戴」

「いいぜシェリル。俺達の歌を響かせようぜ銀河に」

「ええ」

「バサラさん。ありがとうございます。私これからもっと頑張ります。歌も…恋も」

「あら、ランカちゃんそれは宣戦布告」

「シェリルさんそんなのじゃないです。私もバサラさんみたいに自分の想いを真つ直ぐ届けられる歌を目指します」

「お前なら出来るぜランカ。頑張れよ」

「はい」

「じゃあな3人も、アルトわりーがオズマによろしくな」

「あつ、そういえば…わかった」

飛び立つVF-19改

「行っちゃった」

「まさか過去の人間に問題を解決してもらおう手助けをされるとはね」

「また、会えるかなバサラさんと」

「逢えるさ。お前らが歌い続ける限りきつと…」

マクロス△

EP4 僕らの戦場

「へっ着いたっばいな」

無事に時空を越えたVF-19改

「どこださっきの声の場所は」

手当たり次第に飛び回るVF-19改

「所属不明機応答せよ」

後ろからバルキリーが接近していた。

「なんだ」

「当機の所属を応えよ」

「またそれか、俺は熱気バサラ。所属とかはよくわかんねーがマクロス7に住んでるぜ」

「…貴様馬鹿にしているのか」

「はあ」

「マクロス7は約25年前の戦艦だそんな話信じられるか」

「事実なんだけだな」

後ろのバルキリーから発砲される

「何するんだ危なねーじゃねーか」

通信を遮断し攻撃を続けるバルキリー

「しかたねーか」

サウンドシールドを展開し攻撃を防ぐバサラ

「なんだあのバルキリー、シールドを装備してるぞ」

「ハアアアアアアアアアア」

シールドに溜まったエネルギーをバルキリーに放出し動きを止めた。

「バルキリーの機能が停止した」

「あばよ」

その場を後にしたバサラ

「さあどうしたものか……。あれはマクロスか」

暫く進んだ先にマクロス級戦艦を見つけた。

「……ここにいるな」

直感を信じ進み続けるバサラ。マクロス級戦艦からバルキリー部隊が発進する。

「所属不明機関こえるか。こちらマクロス級戦艦『マクロスエリシオン』所属『ケイオス』バルキリー部隊『デルタ小隊』のアラド・メルダース少佐だ。当機の所属を教えてください」

「い」

「俺は熱気バサラだ」

「やはり新統合軍から連絡のきた謎のバルキリーか」

「隊長どうしますか」

「…。パイロット投降する気はないか」

「いいのかよ隊長」

「…その船に歌い手がいるな」

「ほう…。何故そう思う」

「…。5つの個人的な歌声を感じる…。1人は別の場所にあと1人自分の歌声を失いそ

うなやつがその船にいる」

「なっ」

（これが本当に熱気バサラなら…）

「ああお前さんの勘は合ってるよ」

「アラド隊長いいんですか」

「別に俺達は民間企業『ケイオス』の所属であつて、新統合軍の兵士ではない。」

「ですが…」

「熱気バサラと言つたなパイロット。今、うちの船は色々と問題を抱えていてな。協力

してはくれないか」

「歌に関係することなら任せろ。あとは全く出来ねーぞ」

「よし。交渉成立だあんたがいいなら着艦してくれ。デルタ小隊は撤収な」

マクロスエリシオンに着艦するバサラ

「叔母様に見せてもらった写真そっくりだ」

エリシオンに降りたつて早々、ゼントラーディーの面影を持つパイロットスーツを着た少女に話しかけられた。

「写真」

「デルタ小隊所属ミラージュ・ファリーナ・ジーナス中尉であります」

「ジーナス：どつかで聞いたな」

「ミレーヌ・ジーナスは私の叔母にあたります」

「へえー。ミレーヌが叔母さんか良い土産話しが出来そうだけ」

「本当にFire Bomberの熱気バサラさんなんですな」

「そうだけ」

「そいつはスゲー。チャック・マスタング少尉です」

「よろしくな」

皆がバサラに興味を示し近づく中一人足早に去る男

「あいつは…」

「ハヤテ・インメルマンあいつもパイロットです」

「あんたがアラドだな、よろしくそっちは…」

「戦術音楽ユニット『ワルキューレ』リーダーのカナメ・バッカニアです。お会い出来て光栄ですバサラさん」

「…内に秘めた力強い想いか。あんた良い歌を歌えそうだな」

「ありがとうございます。それでですねバサラさんお願いが」

「案内してくれよ。そいつも『ワルキューレ』ってやつメンバーなのか」

「はい。こちらに」

とある一室に案内されるとある男女が喧嘩をしていた。

「歌ってくれよフレイア。このままじゃいつまでも俺は飛べないじゃないか」

「ハヤテの言うこともわかるんけど、またハヤテが暴走したら…」

「じやまするぜ」

バサラは当たり前のように部屋に入る。

「あんたさっきの」

ギター片手に歌い出すバサラ

「なっ歌」

「ハヤテ一旦部屋を出てくれ」

「こんな得体のしれない男を残してフレイアを一人にするのかよ」

「いいから出てこい」

「…わかったよ」

不機嫌な顔で部屋を出るハヤテとそれを追うミラージュ

(なんかねこの人の歌、聴いててむちゃや元気が湧いてくんね)

「フォールドレセプター歌い始めて10秒で今計測出来る最高値に到達しそれを維持」

「凄い…」

「これが伝説のバサラさんの歌の力…」

周囲の人々はすでにバサラの歌に魅了されていた。

(なんだろう、私も歌いたくなってきた…きたけど…)

(一緒に歌おうぜフレイア)

(誰かね。あつ部屋に入るなりギター片手に歌い出した人)

(熱気バサラだよろしくな)

(凄いんねバサラさん。バサラさんの歌から雲一つ無い青空を想像出来る)

(面白れーこというなお前。俺もフレイアは良い歌声を持つてると思うぜ)

(イヒヒヒそんなことないんよ。でもなんでそう思うん。バサラさん私の歌聴いたこ

とあるん)

(ない。俺の感覚がそう告げてるだけだ)

(…)

(だから証明してくれよ。俺の感覚が間違ってるねーって。俺のハートにお前の歌を届け
てくれ)

(うん…)

(どうした)

(私が歌うとハヤテが暴走しちゃうんよ)

(好きなんだなそいつのこと)

(あわわわわ)

(やっぱ面白いなフレイア。なあフレイア歌はな人のために歌うよりも前に自分のため
に歌っていいんだぜ)

(自分のために…)

(歌いたい時に歌う。それが歌ってもんだ)

(よくわからんね)

(なんでお前は歌いたいと思ったんだ)

(私はワルキューレのメンバーになりたかった。カナメさん、マキナさん、レイナさんそ

して美雲さん…皆と一緒に歌いたいと思った)

(そいつらと歌うとどんな気分になるんだ)

(ルンが元気になって。私の心も幸せに)

「フレイアのルンが光出した」

(そうだそれが歌だ)

(この気持ちを皆に届けたい)

(行けお前の歌を届けろフレイアーー!!!)

「例えば途切れた空が見えたなら、震える僕の声が聴こえるのなら」

「フレイアフォルドレセプターアクティブ」

「フレフレ」

「チクチクからのルンピカキタ」

「壊してもつともつと遠くを感じて、そこにそこに君はいますか」

「ルンがはしゃいでるな」

「良かったフレイア」

「閉ざされた空へ」

「お前の触覚跳び跳ねてて面白れーな」

「バサラさん…エツチ」

歌声を取り戻した歌姫

「よし美雲が揃い次第作戦を開始するぞ」

デルタ小隊とワルキューレによる。銀河奪還作戦が今始まろうとしていた。